

〈学術論文〉

「言語文化」の授業における古典文法の役割について

杉山俊一郎 信州大学学術研究院教育学系

キーワード：「言語文化」の授業，古典文法，古文読解，文法教育

1. はじめに

文部科学省（2018）では，新設科目「言語文化」のねらいを次のように記す。

- ① 上代から近現代に受け継がれてきた我が国の言語文化への理解を深めることに主眼を置き，全ての生徒に履修させる共通必修科目として新設した。小学校及び中学校国語科と密接に関連し，その内容を発展させ，総合的な言語能力を育成する科目として，選択科目や他の教科・科目等の学習の基盤，とりわけ我が国の言語文化の担い手としての自覚を涵養し，社会人として生涯にわたって生活するために必要な国語の資質・能力の基礎を確実に身につけることをねらいとしている。

(p.109, 傍線は本稿執筆者による。以下同じ)

ここに見られる「我が国の言語文化」の内容については，次のように記されている。

- ② 我が国の言語文化とは，我が国の歴史の中で創造され，継承されてきた文化的に高い価値をもつ言語そのもの，つまり，文化としての言語，また，それらを実際の生活で使用することによって形成されてきた文化的な言語生活，さらには，古代から現代までの各時代にわたって，表現し，受容されてきた多様な言語芸術や芸能などを広く指している。「言語文化」では，これらのうち，文化としての言語，文化的な言語生活，多様な言語芸術等に重点を置き，理解したり尊重したりすることにとどまることなく，自らが継承，発展させていく担い手としての自覚をもつことを目指している。

(p.111)

また，文部科学省（2016a）に拠れば，こうした「言語文化」新設の背景には，従来の古典学習において次のような課題のあったことが記されている。

- ③ 特に高等学校教育においては，教材の読み取りが指導の中心になりがちで，国語による主体的な表現等が重視されていないこと，話し合いや論述など，「話すこと・聞くこと」「書くこと」の学習が十分に行われていないこと，古典の学習について，日本人として大切にしてきた言語文化を積極的に享受し，社会や自分との関わりの中でそれらを生かしていくという観点が弱く，興味が高まらないことなどが指摘されているところである。(p.35)

以上を要するに，「言語文化」の授業では，「文化としての言語」「文化的な言語生活」「多

様な言語芸術」の3要素を、「社会や自分との関わりの中で生かしていく」学習が求められていると言えるだろう。

このような理解にもとづき、本稿では特に「文化としての言語」に含まれるであろう古典文法の、新設科目「言語文化」の授業における役割や可能性について整理してみたい。古典文法については、従来から批判があるように古典嫌いの生徒を多く生み、古文に興味が高まらない元凶のように扱われることも多い。また、文部科学省（2016b）では、「指導においては、文語文法の指導を中心とするのではないことに留意する必要がある」（p.9）との文言もあり、古典文法の学習は「言語文化」の内容に含まれる学習事項というより、「言語文化」の学習を可能にするための事前学習事項のような扱いを受けている感さえある。それでは、古典文法は「言語文化」の授業からもっとも遠い位置にあるものなのだろうか。

ここで結論の一部を先取りすれば、古典文法に「言語文化」との親和性がないかと言えば、そのようなことは全くなく、むしろ古典文法についてしっかりと考えることが日本の言語文化を捉える上で重要であることを本稿では示してみたい。文法的な見方・考え方・捉え方を身に付けておくことは、「文化としての言語」そのものの理解を深めるだけでなく、「言語生活」や「言語芸術」の学習にも有益である¹。以下、本稿では上の主張をいくつかの事例をもとに跡づけてゆくとともに、古典文法の学習によって得られた知見を「社会や自分との関わりの中で生かしていく」、すなわち、「言語文化」の授業に応じた文法学習を可能とするにはどのようなアプローチが有効なのかをも合わせ整理するものである。

2. 古典文法は何のために学ぶのか

2.1 古典文法は「読む」ためのものである

まず、古典文法を学ぶ意義について考えてみたい。

言うまでもなく、古文学習における古典文法には、文を構成要素（文の成分→文節→単語）に分け、その分析によって得られた単語の意味や係り受け関係によって、当該文が表す意味内容を知るツールとしての役割がある。「動詞の活用タイプ」に関する話題に絞って考えても、以下に示すような文の解釈には、活用タイプと活用形の知識が必須である。

① a. 男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり。（『土佐日記』）

b. 海を見やれば、

雲もみな波とぞ見ゆる海女もがないづれか海と問ひて知るべく

¹ ただし、本稿執筆者は古典文法が万能であることを主張しようとするものではなく、また、古典文法それだけをとりたてて徹底的に学習することを提唱するものでもない。古文読解には古典文法以外の知識も活用して総合的に文章を読み解く力が求められているからである。

本稿の意図するところは、古典文法を単なる「品詞分解や現代語訳のためのツール」と見なすのではなく、その知識や枠組みを土台として種々の日本語表現について考えてみるといった、いわば「日本の言語文化を捉えるための虫眼鏡」と位置づけることが、結果的には日本語表現のより良い理解につながるということ、実例をもとに見てゆくことにある。

(『土佐日記』)

①aにおいて、はじめに出てくる「なる」は、耳から得た情報であることを示す助動詞、次に出てくる「なり」は、動詞の連体形に接続して、現代語の「～のだ」に相当する文を形成する助動詞である。このように判断できるのは、二つの「なり」の知識とともに、これら助動詞の上に接続する「す」「する」がサ行変格活用動詞に属し、その活用形の終止形と連体形がそれぞれどのような形になるかという知識があるからである²。また、①bの「見ゆる」が「ぞ」の結びとなり、そこで一旦切れると判断できるのも「ぞ」の結びが連体形になるという係り結びの知識と、「見ゆる」が下二段活用動詞に属し、その連体形がどのような形であるかという知識があるからである。その結果として、

②a. 男もすると聞いている日記というものを、女（の私）もしてみようと思つてするのである（①aの現代語訳）

b. 海を見やると、

雲もみな波に見えてしまう……（ああ、ここに海のことをよく知る）海女がいてくれたらな……どこまでが海でどこからが雲なのかと聞いて知ることができるのに（①bの現代語訳）

といった現代語訳（解釈）が可能になる。

このように、古典文法は文が表す意味内容を知るためのツールとして使用される。文が表す意味内容の把握には、係り結びや条件表現のような構文知識も必要ではあるが、それを構成する要素（単語）の辞書的な意味をおさえることがもっとも基本となる。単語の意味とその組み合わせ方が分かれば、当該の文が表す意味内容はおおよそ理解することが可能である。「古典文法は「読む」ためのツールである」というとき、「読む」の中に含まれるものは、まずは以上に見たような正確な品詞分解と、その結果としての現代語訳がイメージされることが多いであろう。

しかし、文法の学習にはこうした文の大意把握にとどまらない役割を見出すことができる。文法を単なる品詞分解の機械と見るのではなく、単語がなぜそのように切り出されたり整理されたりするのかを考えてみることで、当該文法形式の言語伝達上の意味や表現効果について、より深く、より正確に捉えられるようになることが期待できるのである。

2.2 何ができると「読めた」ことになるのか

『更級日記』に次のような一節がある。

③継母なりし人は、宮仕へせしが下りしなれば、思ひしにあらぬことどもなどありて、世の中うらめしげにて、外に渡るとて五つばかりなる児どもなどして、「あはれなりつる心のほだなむ、忘れむ世あるまじき」などいひて、梅の木の、つま近くて、いと

² なお、例えば「言ふなり」の「なり」は、伝聞・推定と断定のどちらの可能性もあるが、こうした例について「接続から見分けることができない」と判断できるのも、「言ふ」が四段活用というタイプに属するものであり、その終止形と連体形とが同形である、という知識を有しているからこそと言える。

大きなるを、「これが花の咲かむをりは来むよ」といひおきて渡りぬるを、心のうちに恋しくあはれなりと思ひつつ、しのびねをのみ泣きて、その年もかへりぬ。いつしか、梅咲かなむ。来むとありしを、さやあると、目をかけて待ちわたるに、花もみな咲きぬれど、音もせず。思ひわびて花を折りてやる。

頼めしをなほや待つべき霜枯れし梅をも春はわすれざりけり
といひやりたれば、あはれなることども書きて、

なほ頼め梅のたち枝は契りおかぬ思ひのほかの人も訪ふなり

以上の例に見られるように、二つの和歌にはそれぞれ「頼む」という動詞が一つずつ使われているが、それらは活用タイプと意味とを異にしている。すなわち、はじめの「頼めし」は、下二段活用動詞「頼む」の連用形で、「頼みにさせる、あてにさせる、期待させる」の意味、次に出てくる「頼め」は、四段活用動詞「頼む」の命令形で、「頼みにする、あてにする、期待する」の意味である。

品詞分解と現代語訳の完成が目的なのであれば、古典文法の出番はここで終わりとなる。しかし、ここで考えてみたいのは、「なぜ「頼む」には二つの活用タイプがあるのか」ということである。形態的な異なりが何を意味しているのかを問うてみることは、個々の単語の辞書的な意味の理解にとどまらず、古典日本語の表現システムに関するより一般的な観点の獲得が期待できる。

そこでまずは、その手がかりを得るために、他に同様のケース（語幹を共有しながら活用タイプによる対立を形成するケース）がないかを探してみる。例えば、「あく【開く】」と「あける【開ける】」³、「いる【入る】」と「入れる【入れる】」、「しづむ【沈む】」と「しづめる【沈める】」、「やく【焼く】」と「やける【焼ける】」といった例がそれに当たる。次に、これらのペアの間に共通の意味的相違を考えてみたとき、そこにはおおむね受動と能動（および使役）、あるいは意志と無意志といった対立のあることに気付くことは比較的容易であろう⁴。さらに、この知見をもとに「頼む」の関係を考えると、四段活用動詞が能動（「頼みにする」）、下二段活用動詞が使役（「頼みにさせる」）の意であるから、四段活用動詞に使役の

³ ここでは対立関係を見やすくするために、下二段活用動詞の方を一段化後のかたちで示した。

⁴ 「自動詞と他動詞との対立」という観点から上代日本語動詞を整理した釘貫（1996）に拠れば、動詞の自他対立のパターンとして以下の三つの類型が示されており、活用タイプの異なりが動詞の自他を区別する上で重要な位置を占めていることが分かる。

oI. 活用の種類による対応

入る 四段（自）—下二段（他）	付く 四段（自）—下二段（他）
切る 四段（他）—下二段（自）	焼く 四段（他）—下二段（自）…

II. 語尾の相違による対応

移る（自）—移す（他）	流る（自）—流す（他）
寄る（自）—寄す（他）	渡る（自）—渡す（他）…

III. 語幹増加とル・ス語尾付接

上ぐ（他）—上がる（自）	生む（他）—生まる（自）
出づ（自）—出だす（他）	散る（自）—散らす（他）…

「言語文化」の授業における古典文法の役割について

意味が加わったのが下二段活用動詞であると捉えることができる^{5, 6}。

以上に基づき、先の用例に出てくる下二段活用動詞「頼む」が表す意味について分析してみると次のようになる。

- ④a. 下二段活用動詞「頼む」は、四段活用動詞「頼む」の語彙的な意味に使役の意味が加わったものである。
- b. aの文構造を、主語、補語を補って示すと次のようになる。
 [あなたが, 私に, あなたのことを] 期待させておきながら.....]
- c. bから分かるとおり、「頼む」の主語は「あなた (=おば)」であり、「私 (=孝標女)」は被使役者である。つまり、「頼む」気持ちは「私」から自発的に出たものではなく、飽くまで「おば」の働きかけによって生じた受動的な事態であることが表現されている。
- d. したがって、ここでは、自分一人では生じていなかったであろう期待を「私 (=孝標女)」に抱かせながら、いつまでもその責任をとろうとしない「おば」を恨む気持ちが含意されている。

このように考えてゆくと、下二段活用動詞「頼む」の四段活用動詞との意味的な相違が具体的に理解できるとともに、作者がなぜここで「頼みし」ではなく「頼めし」を用いたのか、その使用意図や表現効果も見えてくる。

このように、文法的に考えてみることは、解釈に至るプロセスを段階的、客観的に把握できるようになることはもちろん、当該形式が選択されたことによる文章表現上の効果についても根拠をもって説明できることにもつながっている。機械的な品詞分解の結果に基づく現代語訳の完成を目指しただけでは到達できない「読み」であり、ここに至ってはじめて当該の文が「読めた」と言えるのではないだろうか⁷。

文法を単なる品詞分解や辞書的な意味を調べるためのツールとして扱うのではなく、そのような意味や形になることの根拠を探る手がかりになるものと捉え直すことで、日本語がどのような表現システムを持っているかを知り、そのことが結果的には現代語訳に反映しづらい「意味」の問題にまで立ち入った理解を可能にするのである。

⁵ 表に示すとおり、「頼む」の場合、語幹「tanom-」を共有しながらも、その後続く活用語尾を異にすることで、使役と能動の対応関係を形成している。なお、こうした対立が見られた場合、eを付加する方が派生形と見なしうることについては屋名池（2000）参照。

表

動詞	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
頼む（四）	tanom-	a	i	u	u	e	e
頼む（下二）	tanome-	-	-	-	ru	re	yo

⁶ 中村ほか編（1994）でも、下二段活用動詞「頼む」を（四段活用動詞の意味に）「使役の意の加わったもの」（p.186）とする。

⁷ こうした手続き自体、あるいは不要に思われるかもしれないが、そのような意味や解釈に至るプロセスを、手順を追って丁寧に説明することで、結果的には解釈のつまずきを救うことになるように思う。

2.3 現代語訳には反映しづらい文の「意味」を捉えることの大切さ

現代語訳には反映しづらい「意味」を捉えることは、当該文の意味理解にとどまらず、文章全体の解釈にも影響を与える場合がある。

⑤かくのみ思ひくんじたるを、心もなぐさめむと、心苦しがりて、母、物語などもとめて見せたまふに、げにおのづからなぐさみゆく。紫のゆかりを見て、つづきの見まほしくおぼゆれど、人かたらひなどもえせず。たれもいまだ都なれぬほどにてえ見つけず。いみじく心もとなく、ゆかしくおぼゆるままに、「この源氏の物語、一の巻よりしてみな見せたまへ」と心のうちにいのる。親の太秦にこもりたまへるにも、ことごとなくこのことを申して、出でむままにこの物語見はてむと思へど見えず。いとくちをしく思ひ嘆かるるに、をばなる人の田舎より上りたる所にわたいたれば、「いとうつくしう生ひなりにけり」など、あはれがり、めづらしがりて、かへるに、「何をかたてまつらむ。まめまめしき物は、まさなかりなむ。ゆかしくしたまふなる物をたてまつらむ」とて、源氏の五十余巻、櫃に入りながら、在中将、とほぎみ、せり河、しらら、あさうづなどいふ物語ども、一ふくろとり入れて、得てかへる心地のうれしさぞいみじきや。(『更級日記』)

ここで傍線部「わたいたれば」には、二つの可能性がある。

- ⑥ a. 「わたい」はサ行変格活用動詞の連用形「わたし」のイ音便形(＋「たり」＋「ば」)
- b. 「わたい」はラ行変格活用動詞の連用形「わたり」のイ音便形(＋「たり」＋「ば」)

⑥a であれば「誰かに行かされた」、つまり作者自身の自発的な行動ではなかったことになり、⑥b であれば移動は作者自身の主体的、意志的な行為を示していることになる。今、そのどちらなのかを考えるために、いくつかの古語辞典で「イ音便」について調べてみる⁸。

- ⑦ a. ……又、平安初期から、音便の現象が発生して、語中のキ(ki)・ギ(gi)・シ(si)の子音が脱落してイ(i)となり、ク(ku)がウ(u)となった。又、ヒ(ϕi(Fi))・ビ(bi)・ミ(mi)の母音が脱落してム(m)となり、チ(ti)・ニ(ni)・リ(ri)の母音が脱落して促音、又は撥音ン(n)となった。(築島, 2011, p.686)

b. キ・ギ・シ・リの音節の頭子音が脱落してイという母音が残ったもの。

(秋山・渡辺, 2000, p.1340)

c. 語中・語尾の「き」「ぎ」「し」(まれに「たてまつり」などの「て」, 「ござり」などの「り」)が「い」となるもの。(鈴木ほか, 2019, pp.1320-1321)

d. 活用語の活用語尾部分のキ・ギ・シの子音が脱落して「イ」の音に変化する現象。

(中村, 2007, p.113)

以上の記述からは、歴史的にイ音便にはラ行四段活用の連用形「り」から生ずる例の少な

⁸ あまり使用されないようだが、多くの古語辞典には巻末に付録があり、「音便」も(辞書の見出しだけでなく)ここで調べることができる。

「言語文化」の授業における古典文法の役割について

いことが知られる。つまり、ここでの「わたいたれば」は、「わたしたれば」のイ音便形と考えるのが妥当であり、したがって文意は、作者がふさぎ込んでいる中であって、タイミング良く上京した叔母のもとに家族（母親）が出向かせた、と解釈する方が自然なことになる⁹。

このように解釈の相違は、前後の文脈を含むこの場面全体の読みにも関わってくる。すなわち、ここでは辛いこと、悲しいことが重なってふさぎ込む作者、何か思うことがあっても気軽に相談できるような相手も少なく、自分ひとりではどうにもならずただ思い嘆くしかない作者の状況にあって、たまたま田舎から上京してきたおばがいた。母親がそのおばのもとへ作者をさし向け、その際偶然手に入ることになった物語に作者は喜びをおさえることができない、という展開と見るのできるのである。

もちろん、情報としては「作者がおばのもとに移動した」点は同じであるが、意志的、能動的に「行った」のか、無意志的、受動的に「行かされた」のかという違いによって、場面全体の読み、結末部分「得てかへる心地のうれしさぞいみじきや」の気持ちの読み取りにも違いが出てくることになるだろう¹⁰。文法的な読みには、現代語訳には反映しづらい文の「意味」を捉え、文章全体の趣を読みとる契機となる役割もあるのである。

3. 文法的に考えることの波及効果

3.1 一般化することで養われる文法の見方・考え方・捉え方

さて、以上のような個別例の分析を一般化することで得られた知見は、個別具体的な文の解釈にとどまることなく、他の言語事象を捉える上でも有効に働くことが多いように思う。

本節では、2.2 で述べた「活用タイプの相違」を考えた際に抽出された、「受動と能動（および使役）、意志と無意志」の観点から他にどのような文法事例を見ることができるのか、以下にその若干を例示してみる。

(1) 助動詞「む」の意味

「む」は、事態が未実現であることを表す。〈推量〉と〈意志〉〈勧誘〉とは、前接する語句の意志性によって区別できる（無意志の場合は〈推量〉）。〈意志〉と〈勧誘〉とは、その行為が話し手・書き手自身の行為に限定されるか、聞き手・読み手にもその行為を促すものとなっているかの違いである。両者は連続的であり、基本的には文脈によってそのどちらかを判断する必要がある¹¹。

(2) 完了の助動詞「つ」と「ぬ」の使い分け

⁹ このこと自体、佐伯（1955）に指摘がある（p.63）。

¹⁰ したがって、例えばこの場面を、作者の能動的動きと捉えて、「苦境を打開しようとする作者の行動力・ファイトに胸を打たれました」とか、「物語を求める作者の執念に圧倒されました」（以上は本稿執筆者の作例）というのは、読みとしては外れているだろうと思う。

¹¹ これは、現代語の助動詞「う・よう」に対する説明ではあるが（杉山，2019）、「む」の場合にも適用可能だと思う。なお、「む」そのものの理解については吉田（2017）も参照。

完了の助動詞「つ」と「ぬ」の相違については、「つ」が他動詞、つまり作為的・人為的な意味を持つ動詞を承け、「ぬ」が自動詞、つまり自然推移的・無作為的な意味を持つ動詞を承ける傾向のあることが明らかである」（大野晋ほか編，1990，p.1473）とされるように、前接動詞の意志性に注目した分析が示されている¹²。

(3) 完了の助動詞「たり」「り」の意味

同じく完了の助動詞「たり」「り」は、現代語訳に「している」をあてることが一般的であるが、古代日本語では「公園で子供が遊んでいる」のような運動の継続を表す例は少なく、意志的な動作を表す動詞に付く場合には、運動の成立と結果・痕跡の存在を表し、無意志的運動を表す動詞に付く場合には、変化の結果の継続を表す。平安時代の「たり」「り」は、すでに実現した動きが何らかの効力をもって話し手の目の前に存在していることを表す形式である。（鈴木，1998，2009）

- ①a. 【運動の成立と結果・痕跡の存在を表した例】「さぶらふ人々の中に、かの中納言の手に似たる手して書きたるか」（『源氏物語』若菜・下）
- b. 【変化の結果の継続を表した例】「六条院には、離れたる屋ども倒れたり」（『源氏物語』野分）

(4) 助動詞「る」の可能用法

否定表現を伴わない助動詞「る」の〈可能〉用法は、一般的には鎌倉時代から見られるとされるが、実際には平安時代から確認できるとの指摘もある（中西 1978，川村 1993 など）。ただし、平安時代の例は、主体が事態の実現を望んでいながらも、「実現しようと努力して（意志的に）実現できた事態（典型的な意図成就）ではなく、思いがけず（非意志的に）実現した事態」を表す際に用いられている。（吉田 2013）

- ②この入りつる格子はまだ鎖さねば、隙見ゆるに寄りて西ぎまに見通したまへば、この際に立てたる屏風端の方おし畳まれたるに、紛るべき几帳なども、暑ければにや、うちかけて、いとよく見入れらる。（『源氏物語』空蝉）

(5) 「修行者あひたり」型表現の表現価値

「修行者あひたり」表現は、「人物甲が別の人物乙に偶然出会った時、その出会いが意志的なものではなく、無意志的なものであることを明確にするために、それまで語り手が視点を置いて語っていた人物から、視点を転換して、甲が出会った相手の乙の方を主格として、「乙があふ」と表現する表現」である。（柳田，2011）

¹² なお、最近の文法概説書を見ると、「つ」と「ぬ」の前接動詞の傾向から一步踏み込んで、「ぬ」が「ものごと」の作用を表わす自動詞について、作用の結果生ずる状態の発生を表わし、「つ」が「ひと」の意志的動作を表わす他動詞について、その動作がすでに完了したことを表わす」とする中西（1957）や、これに修正を加えた吉田（1992）の以下の解釈が支持を得ているように見える。

動詞にヌの下接した述語は〈過程の始発〉を表わし、動詞にツの下接した述語は〈過程の終結〉を表わす

この他「つ」と「ぬ」の意味的な相違については、井島（2011）、鈴木（2009）、野村（2009）などの研究がある。

③宇津の山にいたりて、わが入らむとする道はいと暗う細きに、蔦かへでは茂り、もの心細く、すずろなるめを見ることと思ふに、修行者あひたり。

(『伊勢物語』第9段)

(6) 五段活用動詞と下一段活用動詞の対立

「受動と能動（および使役）、意志と無意志」の観点から現代語の観察にも有効である。

④ ……関東に住む人がJR大阪駅や天王寺駅、京橋駅などを利用すると、場内放送に軽い違和感を覚えるかもしれない。電車のドアが閉まる間際、駅員が「ドアを閉めます」と言うからだ。……（中略）……しかし、多くの鉄道会社で「ドアが閉まります」と放送するのは、ドアを主語にすることで、柔らかく伝わる効果があるからだろう。JR西日本では今も試験を続けている。「閉めます」を全駅に広げるかどうかは検討中だ。(『読売新聞』2004年4月27日朝刊)

(7) 格助詞「で」の意味

格助詞「で」が表す意味のうち、〈原因・理由〉と〈手段〉とは、述語の意志性によって区別できることがある。

⑤ナイフで手を切った。

このように、文法的に考えて一般化した視点は、他の言語現象を捉える上でも適用可能な場合があり、日本語の表現システム、特徴を捉えるために有効に働くことが分かる。

以上に挙げた諸例は、古典語、現代語文法の諸現象を、共時的に観察する際の有効性を示したものであるが、以下に見るように、これを通時的な観察にも適用することによって、過去から現在までに通ずる日本語表現の特徴を捉えることにもつなげることができる。

3.2 一般化した観点は「言語生活」「言語作品」の理解にも応用が利く

(1) 「行かせてしまった」の表現価値

福山雅治「桜坂～featuring WISE」に、以下のような歌詞がある。

⑥なぜ行かせてしまったんだろう？

「行かせる」という使役動詞は、

⑦宿題を取りに行かせる。(作例)

のように、意志動詞として使われるのが一般的だが、「行かせてしまったんだろう」から意志性が感じられないのはなぜだろうか。逆に、なぜこのような無意志文において使役動詞が使用されているのだろうか。

このことを考えるヒントとなるのは、次のような例である。

⑧ a. がけの ふちを あるいていた オオカミは、うっかり あしを すべらせてしまったのです。(「オオカミのともだち」)

b. 思えば、このひとを盗むように愛したのも、こんなところで死なせたのも、みな自分のまがまがしい愛欲の煩悩のせいなのだ。わが心からのせいで、このいとし

人を死なせてしまった。(「新源氏物語」)

⑧aでは、「うっかり」という言葉から分かるように、不注意によって「足が滑る」という事態が生じている。崖のふちを歩いているのであるから、それなりに注意は払って歩いたはずだが、ふとした瞬間に「足が滑ってしまった」、しかし、足を滑らせないように歩いたのはいたので、「滑らせ」たくはなかったのだけれども、「滑った」のである。「滑った」のではなく、「滑らせた」と表現することで、その事態を生じさせたのが自分の責任にあることを表した例だと言える。

⑧bは、光源氏が物の怪にとりつかれて死んでしまった夕顔の死を悔やむ場面である。ここでは、夕顔は物の怪によって「殺された」のであり、状況的に光源氏がそこに関与することはできないはずなのであるが、光源氏自身は自らの愛欲がこのような事態を招いたことを疑い、夕顔は「殺された」のでも「死んだ」のでもなく、自分が「死なせた」のだと表現することで、すなわち、自らをこの事態を招いた主語とすることで、その責めを負おうとした例だと言える。

不注意で「滑らせた」にしても、不可避で「死なせた」にしても¹³、二つに共通することは、自分が望んではいない事態の主語を自分とすることで、その責任を負い、そのことで後悔の念を表そうとした表現だ、ということである。

これらを踏まえれば、「行かせてしまった」という表現も、恋人が出ていくという、自分には望ましくない事態、自分の意志では生じるはずのない事態の出来に対し、あえて使役表現を使い、自らをその動作主体として表現してみせることで、後悔の念を強く示そうとした表現であると解釈することができるだろう。

(2)「射させた」は武士の強がりか

前項のように、無意志的な事態を使役動詞によって表現することには、後悔や自責の念を強く表出するという特殊な表現価値が備わるのであるが、それでは、こうした受動的な事態を使役表現によって表現する方法は、いつからあったのだろうか。

ここで想起されるのは、古典文における次のような例である。

⑨太田太郎我身手負ひ、家子郎等おほく討たせ、馬の腹射させて引退く。

(『平家物語』巻12、判官都落)

傍線部は、文脈的に「討たれ」「射られ」などの受身表現が期待されるところであるが、ここでは使役表現が用いられている。軍記物語に見られるこうした表現は、従来「使役を使つての強がり表現」(山口 2006, p.124)のような説明がされてきた。

しかし、近年の研究に拠れば、実はこうした使役表現による無意志事態の描写は、中世軍記物語に特有のものではなく、すでに上代から見いだせることが指摘されている¹⁴。

¹³ 「不注意」「不可避」の用語は柳田(2011)に拠る。

¹⁴ ただし、こうした表現を時代ごと、資料ごとに整理したときに、どのようなタイプが、どれだけ見られ

「言語文化」の授業における古典文法の役割について

⑩ a. ...立ち躍り 足すり叫び 伏し仰ぎ 胸打ち嘆き 手に持てる 我が子飛ばしつ

[安我古登婆之都] (『万葉集』巻5・904, 柳田, 2011, p.107)

b. 夜の間とて, 船屋形にさしはさめりければ, 風に吹きならさせて, 海に入れて, え飲まずなりぬ。(『土佐日記』)

新全集頭注に拠れば, ⑩a の「飛ばしつ」は「愛児の死んだことを, 飛び去ったように, かつ作者が自らの意志で行かせたように表現したもの」とし, 「掌中の玉の わが子を失った」と訳す。新大系・岩波文庫では, 「横風のために飛ばしてしまったの意か。あるいは, 靈魂を天高く飛ばしてしまったの意か。諸説あって決まらない」とするが, いずれにしても「てしまった」との訳出である。⑩b は, 漢方薬を夜間だけと思って船屋形に差し挟んでおいたら, 風に吹かれて海に落ちてしまった, という例である。どちらも, 不可避, 不注意の事態を自分ごととして後悔や自責の念をもって表現したものと解釈すべき例であり, 先に見た現代日本語の例に通ずるニュアンスを持っていると言える。

このことから考えれば, 用例⑨に見られる「討たせ」「射させて」も武士特有の強がり表現というよりは, 古代から現代まで続く日本語表現の一種である, と考えた方が自然であろう。そして, そのように見ることによって, 「自らは細心の注意を払い, 最善を尽くして戦闘に臨んだのに, 力及ばず敗れるに至った」無念さを表現したものとして, 当該の文章が伝えようとするニュアンスも見えてくるのではないかと思う。

以上, 本節では, 文法的な分析によって得られた観点(「言語」)が, 言語の運用(「言語生活」)や作品解釈(「言語芸術」)にも波及的な効果があることを述べた。

4. 古典文法と言語文化をつなぐには

4.1 古典語と現代語を対照させて考える

ここまで, 「古典文法を学ぶことは, 「言語文化」を学習する上でどのような効果があるか」という観点から, 古典文法を単なる品詞分解と現代語訳のツールではなく, 言語そのものを観察するためのいわば「虫眼鏡」として取り扱っていくことが種々の面で有益であることを見た。次に, 本節ではここまでの整理を踏まえて, それでは, 古典文法の学習を「社会や自分との関わりの中で生かしていく」ための文法学習にはどのようなアプローチがありうるのか整理したい。これには大きく二つが考えられる。

その一つは, 古典語と現代語とを対照させ, その間を行ったり来たりしながら古典文法を捉えていく方法である。3.2. (2) で見たとおり, 古典に見られる表現形式を, 現代と断絶したものと見るのではなく, 「現代語とのつながり」という視点から通時的に眺めてみると, 古文に特徴的だと指摘されている, そのために古典語特有であると思われがちな種々の表現形式も, 実は現代語とつながっていることの多いことに気付く。

るのかはもう少し詳しく調べてみる必要のあるところである。

例えば、格助詞「の」には、同格を表す「の」、比喻を表す「の」と呼ばれるものがある。

① a. 【同格】ある荒夷のおそろしげなるが…… (『徒然草』142段)

b. 【比喻】世になくきよらなる玉の男御子さへ生まれたまひぬ。(『源氏物語』桐壺)

これらの「の」は、確かに現代語の話し言葉ではあまり観察されることは少ないが、次のとおり、文学作品やJ-POPの歌詞などを見ていると、その例を拾うことができる。

② a. 【同格】オモユとってオカユのもっとうすいのを食べさせたり……

(「おとなになれなかった弟たちに…」)

b. 【比喻】ガラスの向こうには 水玉の雲が

散らかっていた あの日まで (スピッツ「楓」)

古文に特徴的な表現も「特有」ではなく、現代語に引き継がれていることが分かる。

次に示す③aは、不可能を表す「え…ず」であるが、③bに示すように「よう…ん」と訳するものがある。

③ a. わらはやみをして、あたり日にはべりつれば、口惜しくえまゐりはべらずなりぬる (『大鏡』)

b. わらはやみをわづらいまして、ちょうど今日が発作日でありましたので、残念ながら今日はよう参らんことになってしまいました (橘, 1954)

実は「え…ず」は、現代の西日本方言に見られる不可能を表す形式「よう…ん」に受け継がれている形式である (金沢, 1995)。

④ a. え見たまひはてず (『源氏物語』桐壺)

b. ようお読みになれしまへん。(「現代京ことば訳 源氏物語」)

そもそも平安時代の仮名文学作品は、京都で書かれたものなのであって、現代語との対照には、日常会話との比較だけでなく、方言や文章ジャンルといった「位相」の問題にも注意してみる必要がある。対象とする文の性格に合わせて現代語の資料を選択し、考察の材料を探してみることで、古典語にも現代語にも敏感な感覚の養われることが期待できる。

また、そうでなくても、近現代に創作された比較的身近に感じられる例を取りあげれば、古典文法と現代とのつながりは実感できるであろう。

次の例は、係助詞「こそ」の意味用法を取りあげてみたものである。

⑤ a. 【係り結びを構成する例】今こそわかれめ、いざさらば (「仰げば尊し」)

b. 【逆接条件句を構成する例】松本伊那佐久善光寺 四つの平は肥沃の地

海 こそなけれ物さわに 万ず足らわぬ事ぞなき (県歌「信濃の国」)

4.2 現代語の観察・整理の結果をもとに古典語の世界を照射する

藤森 (2019) では、「通史的に言語作品を読む学びを構想するとき、日本史の授業のごとく古代から現代へと時間軸を追って作品を並べ、順々に読み込んでいく展開が設定されがちである。このような展開も無意味とは言わないが、往々にして教師が敷いたルールに沿っ

と与えられた作品群を読むという受動的な活動に陥る」とした上で、「伝統的な言語文化」の学びでは、「現代から過去へとさかのぼる」進め方が「一つの典型であると認識したい」とする (p.108)。この考え方は、古典文法・単語の学習にも有効であり、現代語の観察・整理の結果をもとに古典語の世界を照射する行き方がありうるだろう。例えば、4.1の最後に指摘した「位相」をもとに考えてみる。「位相」とは、

⑥ 1つの言語の中にある多様性 (バリエーション) を示す用語。社会集団や使用場面によって異なることば (特に語彙) のことを言う。(森山・渋谷編, 2020, p.7)

とされるもので、「地域による違い (方言)」「社会集団 (性別・年齢・職業など) による違い (社会方言)」の別があり、この他に、実際の言語生活には存在せず、漫画やアニメといった仮想言語の中で観察される「役割語」や¹⁵、場面による言葉遣いの違いなども存在する。こうした現代語の観察・整理の結果得られた枠組みを古典語に適用してみると、例えば以下のような例を指摘することができ、一見同じように見える古文でも、いつも同じ調子で書かれているわけではなく、人物や場面に応じて表現が異なっていることが観察できるのである。

(1) 漢語使用の男女差

⑦ 【横川の僧都】「いとあやしう、稀有のことをなん見たまへし。この三月に、年老いてはべる母の、願ありて初瀬に詣でてはべりし、帰さの中宿に、宇治院といひはべる所にまかり宿りしを、かくのごと、人住まで年経ぬるおほきなる所は、よからぬ物かならず通ひ住みて、重き病者のためあしきことどもやと思ひたまへしもしるく」とて、かの見つけたりしことどもを語りきこえたまふ。【明石の中宮】「げにいとめづらかなることかな」とて、近くさぶらふ人々みな寝入りたるを、恐ろしく思されて、おどろかさせたまふ。(『源氏物語』手習, 小野, 2016, p.256)

『源氏物語』手習巻にある横川僧都と明石の中宮との会話であるが、横川僧都の方が「稀有のことをなん見たまへし」(めづらしい経験をしました) と言っているのに対し、明石の中宮が「いとめづらかなることかな」(本当に珍しいことですね) と受けている例が指摘されている。男性が漢語を用いているのに対して、女性は同じ意味の和語で言い直している点が注目される例である。

(2) 高い学識を備えた男性の会話

⑧ 【博士】「おほし垣下あるじ、はなはだ非常にはべりたうぶ。かくばかりのしるしとあるなながしを知らずしてや朝廷には仕うまつりたうぶ。はなはだをこなり」

¹⁵ 「役割語」については金水 (2003) も参照。なお、役割語研究は近現代語を対象としてすでに多くの研究蓄積があるが、古代語研究においては未だ十分ではなく、今後整理を必要とするところである。古代語における役割語関連の研究については、関 (2009)、西田 (2015, 2016a, 2016b) も参照。なお、西田 (2016a) は、本稿 3.2. (2) で取りあげた使役文による受動的事態の表現について役割語研究の観点から位置づけようとしたものである。

(『源氏物語』少女, 築島裕, 1963, p.814)

平安時代には、『源氏物語』や『枕草子』などに見られる和文語に対して、漢籍・仏典を訓読する際に用いた漢文訓読語という二つの層があったことが知られている。平安時代の言語資料において漢文訓読語は基本的に和文に現れることは少なく、あったとしても、その部分が漢籍・仏典の引用またはその影響下にある場合がほとんどであるが、まれに僧侶や博士といった人々の会話文中には見られる場合のあることが指摘されている。

例えば、「はなはだ」という言葉は、和文では通常「いみじく」「いと」「いたく」と表現するところ、「知る」のうしろに接続する「ずして」は、和文では「で」という接続助詞がついて「知らで」となるところである。また、「非常に」「はべりたうぶ」「とある」などの言葉は、女性の会話文中には出てこないことも指摘されており(築島, 1963), この会話文では訓読語と男性語の両方を使うことによって、高い学識を備えた男性であることを演出していると言えそうである。

(3) 幼児語

⑨三の宮【後の匂宮】三つばかりにて中にうつくしくおはするを、こなたにぞ、また、とりわきておはしませたまひける、走り出でたまひて、「大将こそ、宮抱きたてまつりて、あなたへ率ておはせ」と、みづからかしこまりて、いとしどけなげにのたまへば、うち笑ひて、「おはしませ。いかでか御簾の前をば渡りはべらん。いと軽々ならむ」とて、抱きたてまつりてゐたまへれば、「人も見ず。まる顔は隠さむ。なほなほ」とて、御袖してさし隠したまへば、いとうつくしうて率てたてまつりたまふ。

(『源氏物語』横笛, 森野, 1971, p.47)

「大将こそ、宮抱きたてまつりて」の「こそ」は係助詞ではなく、親しい相手と呼ぶときの接尾語、「たてまつりて」は謙讓語で、補語を高める働きをするが、その補語は「宮」であり、ここでは自分を指していることになる。その後続く「みづからかしこまりて、いとしどけなげにのたまへば、【大将は】うち笑ひて...」から見ても、まだ言葉の運用が十分に身につけていない2歳児の言葉として、わざとおかしな敬語を使わせた例として挙げる事ができるであろう。

このように、一口に古文といっても、そこに現れている個々の形式が持つ性格はさまざまであり、こうした多様性を見ることそのものが日本の言語文化の学習にもなりえているわけであるが、こうした「位相」の知識は古文の読解にどのように生きるだろうか。最後にこのことについて見てみる。

以下は、高校1年生の教科書にも取りあげられることの多い「絵仏師良秀」『宇治拾遺物語』の例である。

⑩向ひに立ちて、家の焼くるを見てうち頷きて時々笑ひけり。「あはれ、しつるせうとくかな。年比はわろく書きけるものかな」といふ時に、とぶらひに来たる者ども、

「言語文化」の授業における古典文法の役割について

「こはいかに、かくては立ち給へるぞ。あさましき事かな。物の憑き給へるか」といひければ、「何条物の憑くべきぞ。年比不動尊の火焰を悪しく書きけるなり。今見れば、かうこそ燃えけれど、心得つるなり。これこそせうとくよ。この道を立てて世にあらんには、仏だによく書き奉らば、百千の家も出で来なん。わたうたちこそ、させる能もおはせねば、物をも惜しみ給へ」といひて、あざ笑ひてこそ立てりけれ。その後によ、良秀がよぢり不動とて今に人々愛で合へり。〔『宇治拾遺物語』6〕

傍線部はどのような調子で発言しているだろうか。ここで「わ」と「たち」に注目して、学習用古語辞典でその意味を調べてみる。

- ① a. 「わ」 相手に親愛の気持ちを表す。また、見下したり、軽んじて卑しめる気持ちを表す。
- b. 「たち」 (神や人を表す名詞に付いて) 尊敬の意味を含んで複数であることを表す。(中村編, 2007, p.777)

ここから分かるとおり、「わたうたち」という表現には、相手を軽んずるとき「わ」と敬意をもって接する場合に使われる「たち」の両方を含む表現である。これはなぜだろうか。

恐らくここは、一旦「わたう」と言い放ちながら、「たち」と持ち上げることによって強烈な皮肉を表現したのであろう¹⁶。その後続く「あざ笑ひて立てりけれ」という表現も、そうした発言と合わせて読むことができるであろう。以上は「位相」の知識を念頭に置いたことで、絵仏師良秀の人物像にも迫ることのできた例だと思ふ。

5. 本稿のまとめと発展的課題

以上に述べたことを箇条書き風にしてまとめると次のとおりである。

- (1) 古典文法は「読む」ためのものである。ただし、「読む」ための古典文法には、単に品詞分解の結果取り出された各単語の辞書的な意味を引き当て、当該文が表す基本的な意味内容を理解して読むための役割だけでなく、当該文で選択されている単語の表現効果を客観的に理解したり、文章全体で表そうとしている表現内容を、言外の意味の解釈も含めて読み取ったりする手がかりを得るための役割があることも、もっと重視されて良い。
- (2) 古典文法そのものに焦点を当てて考えることは一見迂遠なようであるが、個別例を一般化することで得られた観点は、他の言語事象の把握や、「言語生活」「言語作品」の学習にも有益である。
- (3) 古典文法を現代語とつなぐには、以下の二つのアプローチが有効である。
 - ① 古典語と現代語を対照させて考える。
 - ② 現代語の観察・整理の結果をもとに古典語の世界を照射する。

¹⁶ 中山・杉山 (2016)。

さて、本稿で縷々述べて来たことは、本文中あるいは脚注に示した大量の参考文献からも分かるとおり、実は多くの研究者によって指摘、解明された研究成果を素材として、これを古典学習に応用した場合のありようを整理したものなのであって、その意味で本稿のオリジナリティーは、新しい「言語文化」の授業で期待される古典文法の役割を確認したという一点に尽きる。また、こうした国語科授業の中の、特に「読む」学習における文法の意義や効能についても、これまで多くの先学によって示されてきたことであって、その点からも本稿の意義は飽くまで「言語文化」という授業に対する古典文法の役割や可能性を述べたものに留まる点に注意されたい。ただし、こうした日本語学研究の読解教育への応用は、専門研究者ならではの、ある種名人芸的なものと受け取られてきた面があるようにも思われ¹⁷、新しい「言語文化」の授業がはじまったこの段階で、先学によって積み上げられてきた古典文法学習の意義や方法をあらためて確認することにも一定の意義があるように思われる。

本稿において行なった一連の確認作業を通して、「言語文化」の授業における古典文法学習の役割を整理するとともに、これまでの成果はどのように継承でき、これからの言語教育に役立てることができるのかについても不十分ながら見通しを得ることができた。しかし、今回取り扱うことのできた言語事項は極めて少なく、先行研究の方法を共有し、これを十分に活用するためには、これまでの言語研究成果の国語科教育への適用例や授業実践例を網羅的に集成し、言語事項別に再整理して広く一般に提供することが必要になってくる。今後の課題としたい。

謝 辞

本稿は2022年2月11日(金)に長野県国語国文学会東北信支部授業研究会において発表した「古典文法から見る日本の『言語文化』」および、2022年3月1日(火)に甲信越国語教育学会2022において発表した『『言語文化』の授業における古典文法の役割について』をもとに加筆・修正を加えたものである。それぞれの会で発表の機会を与えてくださった西一夫先生、八木雄一郎先生、本稿の構想、推敲段階で協力、助言いただいた本学学部生・大学院生・卒業生の牧峻晟、松本梢、三浦のの香、濱口柚香、松尾悠、柳沢大智の諸氏、ならびに各会で重要な示唆を賜った方々および匿名査読者に対し、記して感謝申し上げます。

資 料

【古典語】

¹⁷ なお、小田(2022)では、古典文を文法的に読むには「ある句型がどのように解釈されるかを明らかにした論考の成果を、同じ句型の解釈にそのまま適用するもの」と、「解釈文法とは無関係に解明された語学的な法則的事実を古典文の解釈に用いるもの」との二つの手法があると整理され、特に後者は、「本来解釈を目的としたものではない日本語学的な知見を、古典文解釈という別の目的に流用しようというものだから、その適用には一種の勘のようなものが必要であり、難易度が高い」と指摘されている(pp.25-26)。ただし、現在は小田(2015)のような、網羅的、体系的で、かつ分かりやすい古典文法書が参照できる状況にあり、日本語学研究の知見を古典解釈に応用したり、古典文法の特徴を体系的に見通したりすることについてその難易度は格段に下がっているように思われる。

「言語文化」の授業における古典文法の役割について

本文中に引用した『万葉集』『土佐日記』『伊勢物語』『源氏物語』『更級日記』『大鏡』『宇治拾遺物語』『平家物語』『徒然草』はいずれも新編日本古典文学全集に拠る。なお、用例を検索するにあたっては、国立国語研究所（2022）『日本語歴史コーパス』バージョン 2022.3 <https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/>を利用した。

【歌詞】

浅井冽作詞（1931）県歌「信濃の国」.

https://www.pref.nagano.lg.jp/koho/kensei/gaiyo/shoukai/kenka.html#content_4（2023年2月2日確認）

草野正宗作詞・作曲（1998）「楓」スピッツ. <https://www.uta-net.com/song/10397/>（2023年2月2日確認）

作詞・作曲不詳「仰げば尊し」. <https://www.uta-net.com/song/76761/>（2023年2月2日確認）

福山雅治作詞・作曲（2006）「桜坂～featuring WISE」. <https://www.uta-net.com/song/112506/>（2023年2月2日確認）

【新聞】

「[日本語の現場] 職場で（19）電車ドア 閉める？閉まる？」『読売新聞』2004年4月27日，東京朝刊，ヨミダス歴史観（読売新聞データベース）.

<https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/>（2023年2月2日確認）

【小説・物語（現代語訳を含む）】

きむらゆういち，田村征三（絵）（2001）『オオカミのともだち』偕成社.

橘純一（1954）『原文対照 大鏡新講』武蔵野書院.

田辺聖子（1984）『新源氏物語（上）』新潮文庫.

中井和子（2005）『現代京ことば訳 源氏物語〈1〉桐壺一明石』大修館書店.

米倉齊加年（1984）『おとなになれなかった弟たちに...』偕成社.

文 献

秋山虔・渡辺実（2000）『詳説古語辞典』三省堂.

井島正博（2011）『中古語過去・完了表現の研究』ひつじ書房.

大野晋・佐竹昭広・前田金五郎編（1990）『岩波古語辞典 補訂版』岩波書店.

小田勝（2015）『実例詳解 古典文法総覧』和泉書院.

小田勝（2022）「古典文を文法的に読むということー『源氏物語』夕顔巻「おのがいとめでたしと」の解釈についてー」『國學院雑誌』123（2），25-36.

小野正弘（2016）「第8章 語彙史」齊籐倫明編『日本語語彙論II』ひつじ書房.

金沢裕之（1995）「可能の副詞「ヨー」をめぐって」『国語国文』64（5），18-31.

川村大（1993）「ラル形式の機能と用法」『松村明先生喜寿記念 国語研究』明治書院

- 金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店.
- 釘貫亨 (1996) 『古代日本語の形態変化』和泉書院.
- 佐伯梅友 (1955) 『更級日記の新しい解釈』至文堂.
- 杉山俊一郎 (2019) 「中学校国語教科書から見た助動詞と文章ジャンル —小規模コーパスを活用した文法用例集作成の構想と検証—」『信大国語教育』30, 45-58.
- 鈴木一雄・小池清治ほか (2019) 『全訳読解古語辞典 第五版』三省堂.
- 鈴木泰 (1998) 「「たり」と「り」=継続と完成の表現」『国文学 解釈と教材の研究』43 (11), 70-77.
- 鈴木泰 (2009) 『古代日本語時間表現の形態論的研究』ひつじ書房.
- 関一雄 (2009) 『平安物語の動画的表現と役柄語』笠間書院.
- 築島裕 (1963) 『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会.
- 築島裕 (2011) 『古語大鑑 第1巻』東京大学出版会.
- 中西宇一 (1957) 「発生と完了—「ぬ」と「つ」」『国語国文』26 (8), 509-525.
- 中西宇一 (1978) 「自発と可能—「る」「らる」の場合」『女子大國文』83, 115-137.
- 中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義編 (1994) 『角川古語大辞典 第四巻』角川書店.
- 中村幸弘 (2007) 『ベネッセ全訳古語辞典 改訂版』ベネッセ.
- 中山緑朗・杉山俊一郎 (2016) 「第4章 時代別〈古典解釈と文法〉—中世語—」『品詞別学校文法講座 第8巻』明治書院.
- 西田隆政 (2015) 「役割語史の可能性を探る (1) 平安時代における年長者の男性の会話文をめぐって」『甲南国文』62, 126-115.
- 西田隆政 (2016a) 「役割語史の可能性を探る (2) 軍記物語における「受身」と「使役」の併用をめぐって」『甲南国文』63, 138-129.
- 西田隆政 (2016b) 「役割語史研究の可能性—平安和文作品での検証」『国語と国文学』93 (5), 59-71.
- 野村剛史 (2009) 「ツとヌ再訪—テクル・テイクと対照しながら」『国語と国文学』86 (11), 41-51.
- 藤森裕治 (2019) 「第2節 言語文化」大滝一登編『高校国語 新学習指導要領をふまえた授業づくり 実践編』明治書院.
- 森野宗明 (1971) 『古文標準問題精講 四訂版』旺文社.
- 森山卓郎・渋谷勝己編 (2020) 『明解日本語学辞典』三省堂.
- 文部科学省 (2016a) 「教育課程部会 教育課程企画特別部会 論点整理」, 1-53.
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/12/11/1361110.pdf (2022年2月28日確認)
- 文部科学省 (2016b) 「教育課程部会 国語ワーキングにおける審議の取りまとめについて

「言語文化」の授業における古典文法の役割について

(報告)」、1-20.

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/068/sonota/_icsFiles/afieldfile/2016/09/12/1377097.pdf (2023年2月1日確認)

文部科学省 (2018) 『高等学校学習指導要領 (平成30年告示) 解説 国語編』東洋館出版社.

屋名池誠 (2000) 「〔書評〕釘貫亨著『古代日本語の形態変化』」『国語学』51 (1), 116-124.

柳田征司 (2011) 『日本語の歴史2 意志・無意志』武蔵野書院.

山口仲美 (2006) 『日本語の歴史』岩波新書.

吉田茂晃 (1992) 「完了の助動詞」考—万葉集のヌとツ—」『萬葉』141, 49-62.

吉田茂晃 (2017) 「生徒に嫌われない古典文法指導を目指して—「推量」の助動詞を面白がる—」『天理大学学報』61 (1), 1-9.

吉田永弘 (2013) 「る・らる」における肯定可能の展開」『日本語の研究』9 (4), 18-32.

付 記

本稿の成果の一部は、令和3年度 JSPS 科研費 (課題番号 21K13014) ならびに国立国語研究所共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」による。

(2022年 9月30日 受付)

(2023年 2月28日 受理)